

菊
錦

阿山居士著

阿山居士著



223
165

085411-000-4

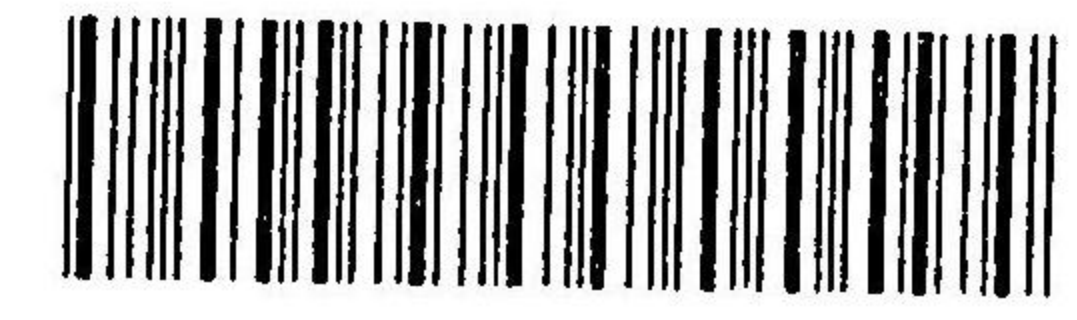
特64-290

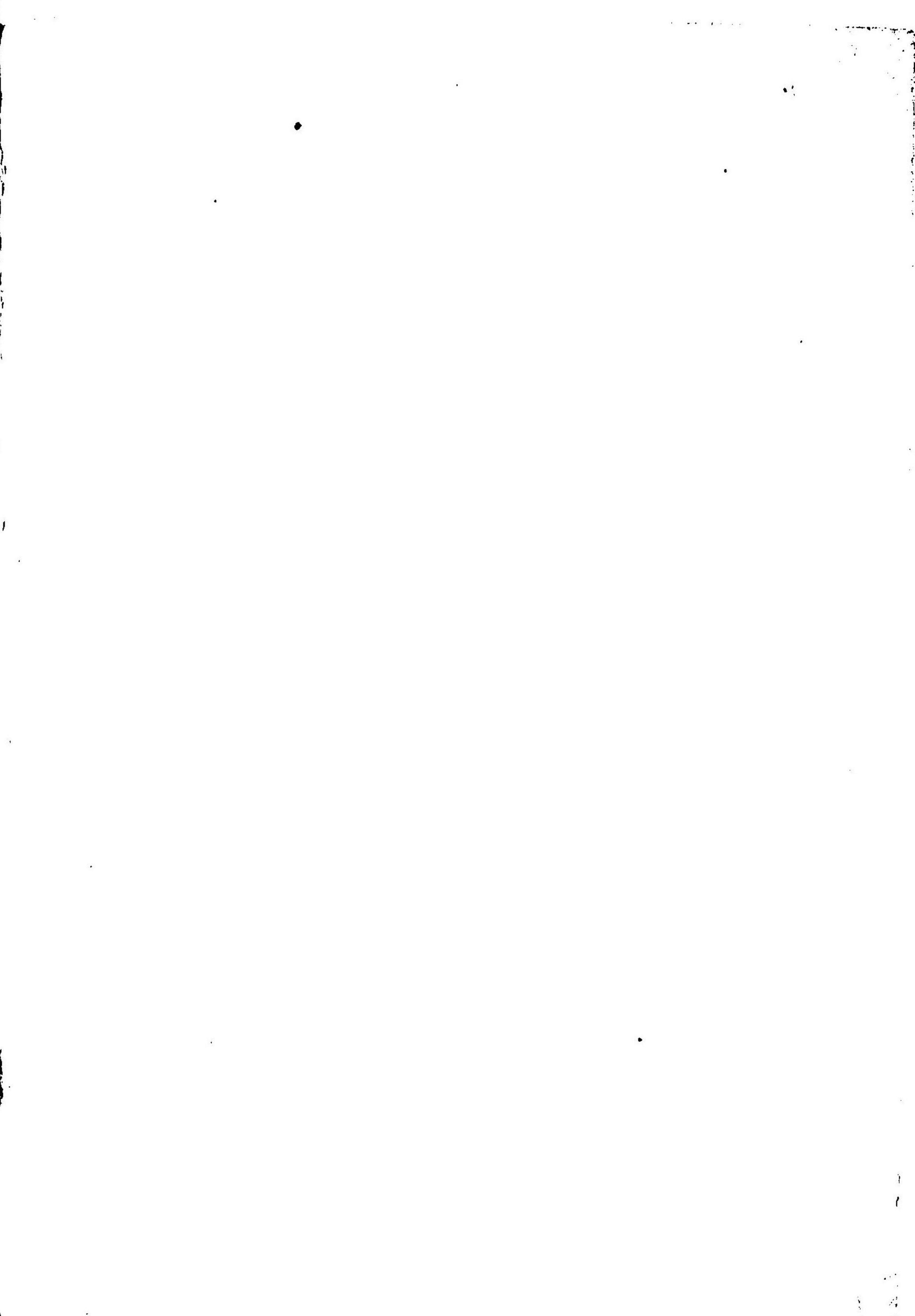
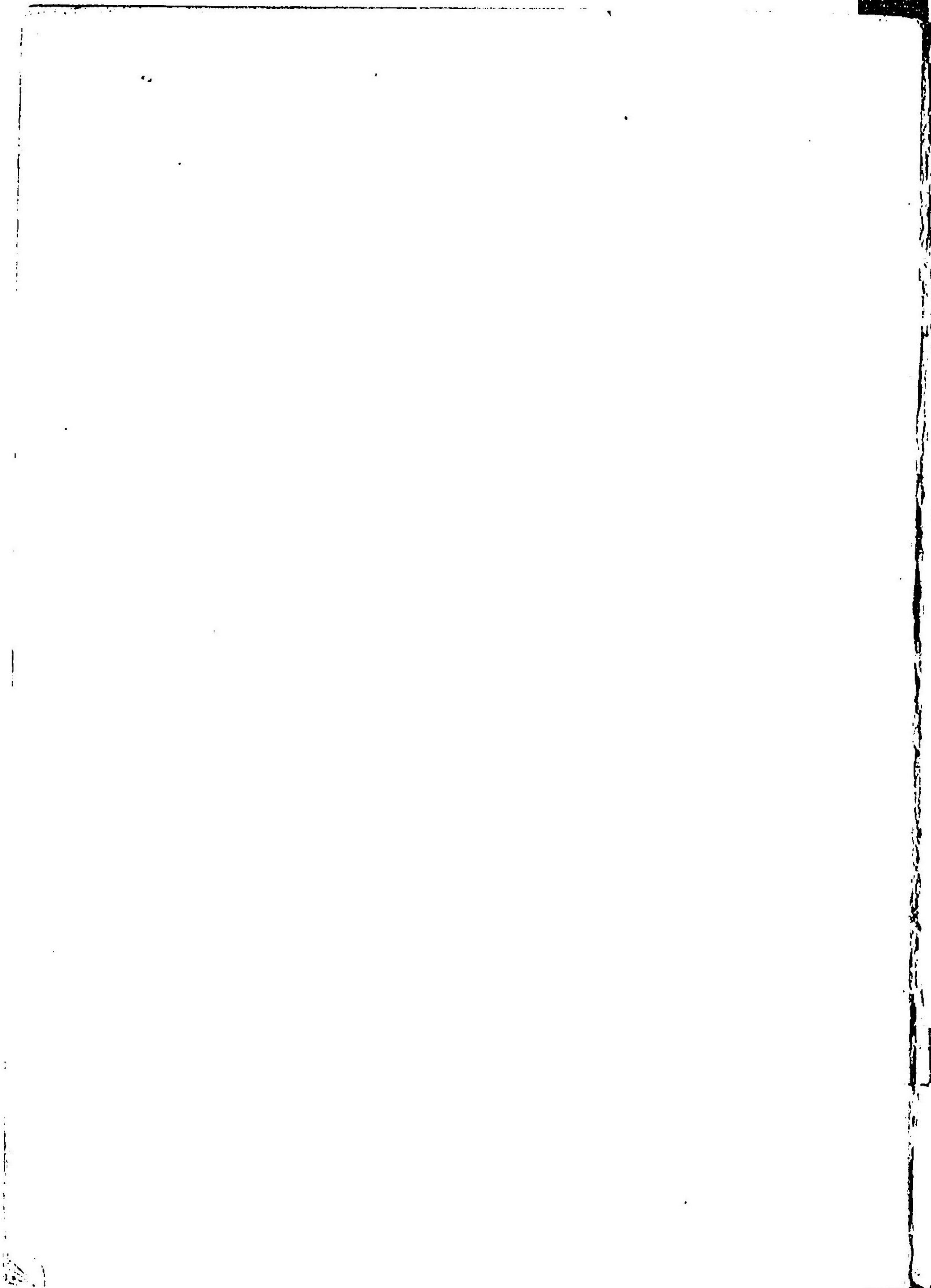
錦と菊

阿山 居士/著

M36

DBC-0387



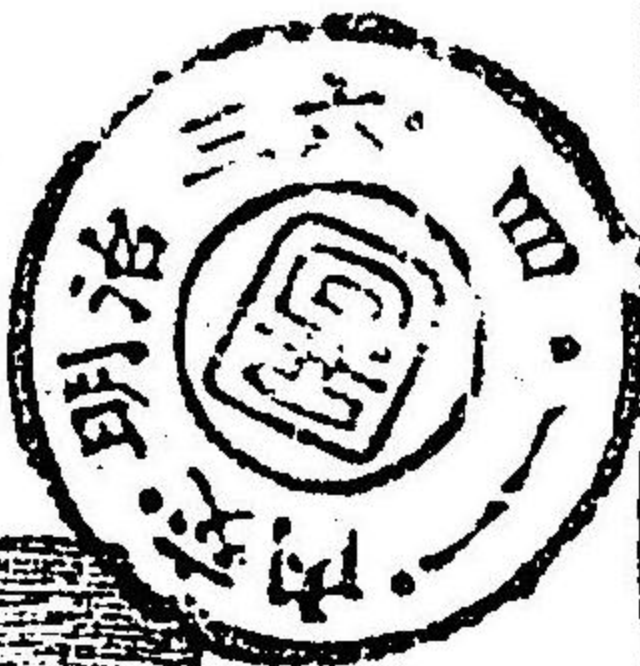


特64

290



錦
花
菊



はしかき

鳥獸といふことより父母を慕ふのこころ切まいて出物のなごともいほるゝの人
誰か故郷を慕はざらんこゝをもて阿山居士身は大學の赤門をくゞりいつか名聲
を世に知らしむるの大文章なりといへ蒙傑反て感情にまうはれ易しの暇への如
く郷里を慕ふの念いやしきりうの感慨 体よりこに溢れ錦と菊との題号の元に
此巻を編まる其の情の切なるまづ面影より筆を辟め吾と云ふに至りてこゝめ又
筆の筆をも載せらる其の文の流暢活達りのこゝろの細事にまで配りたる又もて
未來の大文章たるのささしならん

明治三十六江台の巷に櫻花笛を

ふくむの時雉子屋の伎れ家に於て

識者しるす

にしきこ菊

目次

第一	面影	一
第二	愛	二三
第三	吾家	四七
第四	亡姪	六五
第五	秋望	七六
第六	吾	九五

録附筆のしつく

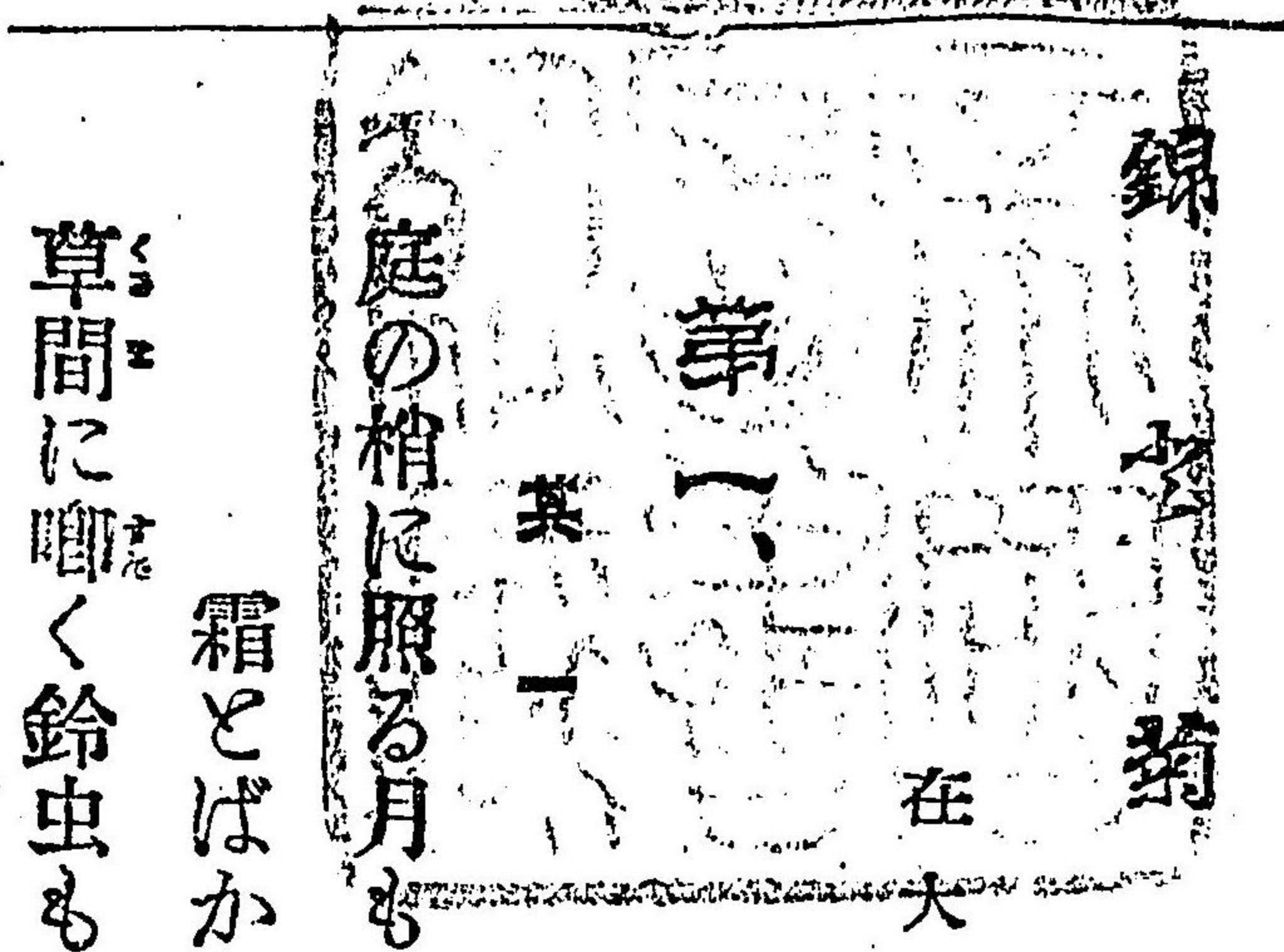
- | | | |
|-----|-------|-----|
| (一) | 田舎の四季 | 一、九 |
| (二) | 郭公 | 一一四 |
| (三) | 園内の夜色 | 一一五 |
| (四) | 山山 | 一一八 |
| (五) | 朝霞夕烟 | 一二九 |
| (六) | 七夕 | 一三一 |
| (七) | 食後の散歩 | 一三二 |
| (八) | 橋上の月 | 一三三 |
| (九) | 庭前の百合 | 一二五 |



佐川春水先生著
英文作則正
中學課程
洋裝本各冊定價四十錢

試驗準備ニ最モ必携ノ良書ナリ
 タルモノナレバ高等學校其他諸官立學校ノ入學
 ※本書ハ文部最近ノ方針ニ從ヒ簡潔正確ヲ主トシ
 取メ誤謬ナキ會話ノ材料ヲ得リニ恰好ノ良書也
 ※本書ノ作文法範例練習題ニハ日常有用ノ語句ヲ
 附シタルハ獨學者ノ良師友タルヲ書ナリ
 ※本書ハ若手ノ練習題ヲ課シ是ニ正確ナル答案ヲ
 遺懸ナカラスシメタル良書ナリ
 ※本書ハ簡單明瞭ナル講義ヲ加ヘ尙範例ノ了解ニ
 以テ成色ノ用法ヲ示シタル良書ナリ
 ※本書ハ八品詞ノ區分ニ從ヒ篇ヲ別チ每章範例ヲ
 ※本書ハ實地應用ニ最モ適切ナル良書ナリ
 ※本書ハ英文法作文ノ父母タル良書ナリ

發行所 東京 神戶 大阪 京都 名古屋 東京 學館



錦
 之
 菊

第一

集一

庭の梢に照る月も

霜とばかりに疑はる。

草間に唧く鈴虫も

在 大學 阿山居士着

思影

早あきとてぞ鳴渡る。

(11)

其二

此夜いかになかもらん、

吾がふるさとの同胞は、

くさの枕に泣きつらん、

遙けきわれを想ひては、

其三

月よ意あらば傳へてよ、

汝が兒は、さかにいや増に、

昨日も今日も思ひてよ、

しもふるさとのわづらひに。』

吾故郷は、阿蘇の山奥にして、山秀で水清く、前に蘇岳の天塀を控へ、後に波野の地蕙を布き、地位一入高く、殆ど熊本の金峰山頂と、水平線を劃するを得る程にて、氣候も冬はいと寒く、夏はいと涼しく、『阿蘇は避暑にこそよけれ、冬はいと寒し。』

(四)

とは周く都人の口にする所。是をもて、我は毎年暑中休暇には歸省するを例とせしが、今年の休暇には、少しく思ふ所あり、山野に放浪せんため先づ榮城(佐賀)の東筑後川の口なる諸富津より帆船を僦ひて筑紫海を横ぎり、百貫石(熊本)の港に上り、陸路五家莊に到り、夫より玖摩川の流に沿ひ、人吉町に出で、宮崎に入り、美々津なる吾姊上の許に投せんことを企てにき。殊に先頃より渠の許よりも、是非來宮すべき旨、屢申越せしに

ぞ、今は心の駒に鞭ちて、愈明くる七月廿四日より、旅立せんとの豫定にて、早く其夜は伏戸に入りぬ。

明日行く旅路の状況も、早や心の中に書き出され、未だ踏ざる土地の景色まで、眼前に髣髴として、宛然現の如くにて、眠も得やらず、折角に閉たる眼も、折々梁に噪ぐ鼠の響に驚かされぬ。斯く眠らでは、明日の疲勞のいと勝らんと思はれ、我と吾心を咎めつゝ、何時しか夜半の夢を結びぬ。

(五)

眼の覺めたるは、曉近くにやありけん。讀經の聲、木魚の音、時々打混る大鈺小鈴の響、絶間なく聞ゆる。そが中に、瀟々として、窓を撲つ小雨の音さへ交りぬ。嗚呼、此頃の晴れ續きたる天氣に、天如何なれば、斯く雨を降らしつる。雨を乞ふ農夫の爲めには、いと目出度かるべきも、今日より旅立せんと思へる我に取りては、如何許不幸のことぞと、獨り心の中に嘆ちつゝ、起き出て戸を推せば、空けしき太と悪しく、北の一天正しく磨墨を

流したらんが如し。左はあれど、斯計りの雨、何程の事やあらん。いで打立たばやと、旅情の慰藉ともなりなん。書冊など、書庫より撰び出して行李に納めぬ。

稍ありて、下婢は朝餉あさかたの膳を運び來り、我に説いて、今日の旅立を已め給へといふ。我、食を終る頃、宿の和尚と坊守とは又來り、我に説いて曰く、『數日來、晴れ續きたる天氣の、今日は又なぞ雨降りけん。殊に何時もに異りて、空景色そらけしきの悪さ。今日の

打立は止めさせられよ、猶ほ甚く降るやも知れずと、坊守は曰く、『想ひ出せば、一昨年の暴風の折空なみの悪しかりしは、丁度今日の如くなりき思ふに暴風の前兆にはあらざるか、兎にも角にも今日は止めにせられて、又の晴日を待たれかし』と。

斯くまで決心したる事を、今日空しく止むるは、實に失望の極と思ひしも、我は答へり、『卿等の説かるゝ通り、我も先き程より甚く悪しき天氣と

こそは思ひつらめ、殊に夏天のことなれば、一日の裡、幾變遷すらんも測られず。諺にも、長者の言は負く勿れといふことさへあれば、今日は卿等の勧めの繩に、卷かれつゝ、已めなん』と、遂に結びし行李も亦解き初めぬ。

此日の正午は何ぞ、朝まだきより篠づく許り降り強めたる雨に、風さへ颯々と吹き加はり、刻一刻、日脚の進むに、隨ひ風勢彌強まり、初め東北の方向なりしが、午後二時頃に至り、風位順に東南

方に轉じ、風力はいや勝り、翠滴たらんとし、緑樹も瀟洒葉末に月影を宿せし、脩竹も青み渡れる繁草も無残や葉をもかれ、枝を折られ、幹を倒されつ。一段は高く、一段は低く、波の瀬をなすが如き猛風は雨と共に吹き來り、屋瓦に衝き當りては宛然、破碎の玉を見るが如し、唯に其れのみかは屋瓦飛んでは飛鳥の如く、地上に落つるは隕石に似たり。雨恠々風颯々、萬雷の一時に轟くかと疑はれ、大厦小屋、屋根を奪はれぬものどて

(十)

はなく、或は捲かれて礎より倒され、渦卷く砂石、烟の如くに、四邊を掩ひ、轟然として榴彈の迸るが如く、時としては萬馬の蹄を並べて、呐喊の間、に馳驅するに似たり。平壤の攻撃、旅順の激戦、斯くやと許りに思はれつ。

正午を過ぐる七時頃に至れば、風漸く靜に、雨少く己み、又折々は雲間に臙げなる星光さへ見られけば、一家の者も漸く己に歸り、我も亦、獨り自然力の雄大なるに感じつ、今宵は御堂、吾室

(十一)

荒れたれば、釋尊の像と共に一夜の假寢を營みき。

早や翌日となりぬれば、昨日の天氣に引き換へ、旭日眩ゆく輝り渡り、昨日の餘波を留めし破れたる壁、仆れたる庭木を、觀るにつけても唯思郷の種。我は此朝疾く起きて、事細々と紙に寫し、故郷に報じ、只管平安の報知來たらんことを望みぬ。此日の正午、我は不圖、新紙上に轉載しつる、今日の警報を讀めり。

風雨の虞あり一區より四區の海陸を警戒す。低氣壓七百四十「ミリメートル」は九州南部の沖にあり、進向の方向未だ詳ならず。(中央氣象臺發…廿四日午前七時)

又曰く、

暴風雨の虞あり一區より三區の海陸を警戒す。(全上…午前十一時)

と、之を讀み終り、吾思郷の鍵は亦打たれぬ。一區より三區までといへば、吾熊本も亦衝路に當る。

天よ、我は謝す。神よ、我は祈る。吾故郷の異變無かりつるを、尙讀みもて行くに、嗚呼、悲慘！長洲熊本の沖にて、漁船六十餘、忽然暴風の爲に吹き漂はされ、行衛知れずと記されぬ。
今は我が思郷の心配の海潮も、愈其度を高めぬ。噫、全市中倒家二百五十軒、半倒五十棟、死亡二人、なる一六、パノラマを演出せる、當時の現象を目撃したる我に取りては、故郷の狀況争で想ひ出されぬかは。

既に、其日も暮れ果て、翌日も過ぎ、又其翌日も過ぎ、我は思郷の闇に迷ひつゝ、一週間餘を経ぬれば、今は陰曆の六月十五日、吾袖に露けき宵の暮色は、一輪の氷月と共に、東方の林の間より來れり。我は徒然の餘、孤燈の下、彼の近松古澗がものし、『曾根崎心中』を、吾を忘れて讀み居たりしが、

「此夜のなごり夜もなごり死に行く身を譬ふれば、あだしが原の道の霜一足づゝに消

えて行く。夢の夢こそあはれなれ。あれか
れどか。曉の七の時が六つ鳴りて。残る一
が。今生の鐘の響の聞きをさめ。寂滅爲樂と
ひいくなり。』

に至りて、胸宇忽ち陰憂を催うし、今ぞ『人生無常』
の眞理を悟りし如く。端なき涙は睫間に浮ひぬ。
餘りの鬱さに、窓を推して彼方の空を眺むれば。
天將た無情なるか、但しは我の多情なるか、萬感
交來り、心緒紊れて茫然たるのみ。我は常に謂へ

らく、『人の情は猶蒸溜の水の如し。蒸水溜は、元是
れ清冽無味なるもの。されど一たび之に酸味劑
を投ずれば、忽酸味となり。之に苦味劑を投ずれ
ば、忽苦味となり。又甘味劑を投ずれば、忽甘味と
なる。人の情に於ける亦斯の如し。情其ものは清
なるものなり。冽なるものなり。又無味なるもの
なり。然れども、一たび悲境に接すれば、忽悲情と
なり。喜境に接すれば、忽喜情となる。情の外界に
反應する、夫れ斯の如し。』と。

麗々たる十五夜の満月、早三竿の頃まで昇り、萬
 空一碧翠巒、霧々として其頂を表はすは、鈿釵、整
 はざる鬢髮の如く、遠山の淡靄を籠めたるは、青
 黛未だ拂はざる蛾眉の如く、秀峰左右に走れる
 は、碧羅巧に裁ちたる袖の如く、白雲一抹之を繞
 ぐるは、細腰に纏へる帯に似たり、緑濃かなる郊
 田の稻葉には、瑠璃を連ねたらん如き白露の風
 無ければ、落ちもせで、一夜の生命を葉毎に宿し、
 消々として、畦畔を流れ来る水の上に、月の桂は

畫かれ、目には見て手にはとられぬ、風情いとゆ
 かし、く水色山光、一室に映じ、半ば破れにし、精舎
 の廂より、依倚最負なき月影は、照り入りぬ。
 是れ此の月をぞ、

あほかたは、月をもめで、これぞこの
 つもれば、人の老いとなるもの

と昔の人も嘆ちつらめ、嗚呼、此夜ぞ、大江の歌聖
 も、

月見れば、千々に物こそ悲しけれ

我身ひとつの秋にはあらねど

と詠みたりけん。そも吾室を照らす今宵の明月
吾身一つのものにあらず。思へば我が親しき故
郷を照らすも亦彼の月。さも一輪の月。幾世隔て
ず。幾諸人の心をか娛ませ。又泣かすらん。想へば
去年の今宵なりけん。我は細かなる病にて。吾家
の奥座に臥しつゝ。家兄と宮崎なる仲姉。坂梨な
る少姉と共に。軒端を光り込む月の淡影を愛で
つゝ。過去の物語。但しは未來の成行を談せしに。

過ぐる月日に關守なく。早や一年をも經ぬ。其當
時。物語りし數々さへ。微かに記憶に残るものを
思へば。盧生が夢に異ならず。吾兄よ。吾姉よ。如何
に。今宵の明月を眺め玉ふ。月よ。意あらば我に知
らせよ。彼等果して。恙なきかを。流水よ。若し情あ
らば。吾父母に問へ。汝が思ふ兒は何處に在りや。
を言ふ勿れ。我が今宵。漑ぎし涙は。そも誰が爲め
に。濺がれつるを。
期くて。中天を指して。急ぎ行く。月影は。早や。吾室

を見捨て、四隣寂寥、孤燈瘦穗暗く、夜は深々と更
け行けば、世は益々に静遠く、聞ゆる犬の吠聲は、
近く廻る火番の鼓音と打和し、身もしみくと
冷え渡り、夜寒の牀に打伏せば、彌や倍すものは
涙のみにて、時刻を告ぐる八幡樓上の鐘、早や三
聲(無論棄鐘は省きて)まで數へられつゝ、其夜は
思郷の淵にぞ沈みぬ。



第二

愛

其一

木この間に小休こやすみ求めんと、

雛ひなもふた、び歸へり来る。

またしき父母と兄弟と、

在あます、ふる巢ねに今ぞ入る。

其二

誰か吾家わがやを、あだなりと、

嘆たん人はいくそばく。

愛たきものも多けれど、

鄙の吾家に、なにぞ勝ぐ、

其三

幾世變らぬ、ふる里へ、

置いたる霜の、父母は、

日毎夜毎に夢にさへ、

詫びつ、待ん己をば。

我は、獨り思へらく、家郷の來信など、遅き暴風の障は無かりしや、吾父母兄弟は無事なるか、吾今度の旅行は如何と。指を屈め、首を翹げて。俟ちけるに、此日の正午、下婢は來り、一封を我に渡して去る。我は、惶しく手に取りて見るに、嬉しや、是れ吾故郷よりの來信ならんとは。我は、今天にも昇らん心地して、封を押切つて讀み下すに、始め家内の平安を述べ、次に暴風の模様を叙し、終に吾今度の旅行を止め、疾く歸省すべきを記しぬ。我

は讀み終り、始めて肩より重荷を下せし如く、喜
びの潮は、忽ち胸に波をなしぬ。只悔ゆるは、日
比ひらの旅行中止せられしことのみ。

此日の午后、我はいざ歸らんと、行李を納め、所要
の書卷を手にしつゝ、與賀町なる寓舎を出で、佐
賀停車場に向ひ、此處にて漁車に乗り、故郷の樂
園に歩武を進めぬ。神崎に憩ひ、中原に休み、鳥栖
にて乗換へ、久留米を過ぎ、羽犬塚を去り、村又村
川又川、山又山と見送りつゝ、又見送られつゝ、

部川、渡瀬、乃至大牟田と、驛名の異なる毎に、熊本は
近きぬ。大牟田の驛を出づれば、何となく懐かし
き、故國の分界線に入る。鳴く鳥の聲、叫ぶ小供の
聲も、聞く程に懐かしき心地ぞする。車窓近く打
倚りて、右手の方を眺むれば、一面鏡の如き海原うみはら
に、漁舸三々五々と、漁イサノボを爲しつゝ、あるは、長州の
仲にして、小代山、温泉岳等、左顧右眄の間に、隱見
するも憎からず。河に釣する翁、鰈介を撈ふ童、淺
瀬に馬を乗り入れて、毛洗ひつゝ、ある馬子、鍬を

肩にし、田圃の間を歸りつゝある農夫も、見るにつけては興多く、此處は高瀬、木葉、植木、池田……と、數ふる間もなく、涼車は吾第二の故郷なる熊本にぞ着きし。顧みれば、氷輪既に東方の林間より軋り出で、華陵山頂、晚烟の翳ひくのみ。斯くて、我は在熊なる舊知の宅を叩き、彼等が久う振の親切なる言の葉に甘んじつゝ、恰も吾第二の兄姉に遇ひたる心地して、暫く家郷のことも忘れ、此地に二日の時日を費し、明くる廿日の

曉天に、熊城を出で、親しき故郷の『樂園』に投ハラダイスね。

今日は恰も吾郷の村祭にて、静かなる吾郷も一入喧しく、糸竹の調シロネも、手に取る如く聞ゆ。殊に吾郷の祭禮には、昔より一族を招くが習慣なまひなりしかば、此日も亦吾親族は吾家に招かれつ。我は未だ錦を着て郷に歸るにはあらで、避暑にこそ歸りつるもの、多少の土産は、吾腦裏に納め置き、たれば、天上天下、唯我獨尊の心地もしたりけん。

歩みに疲れし摺足も、吾家の門に近づきし頃は、何時しか歩調も高まりぬ。近隣の兒女は早くも我を窺ひ見て、吾家に報せしものと見え、吾母は既に門頭に出て我を待ち給へり。

『母様唯今』と腰を屈むれば、母上は『汝が歸りのなど遅き手紙の趣によれば、去る十五日に佐賀を出でしとか、昨日は必ず歸るならんと俟ち置けたるに、今日こそは何ぞ歸りしか。斯く夕立の激しかりし日に……さぞや衣裳も濡れたらん』

と吾背を撫でつゝ、一滴恩愛の涙を落し給ひぬ。我は母に導かれて『唯今』と戸を入れば一時手に取る如く喧しかりし三絃の音も、暫時中止の姿となる。奥座の方を眺むれば、見慣れぬ客も數多見受けぬ。旅装を解けば、下女は來り『唯今御歸り玉ひしか』と一禮しつゝ、勝手の湯殿に、浴湯を取り置きたることを告ぐ。浴を畢へて、臺所に至れば、近隣の處女等は、皆玉襟をかけて、酒肴の取遣りに忙がし。

少間ありて、家兄は來り、『オ、其許も歸りしか。今日は幸、村祭なれば、兼て辱し置きたる、父上の祝賀も執り行ひぬ。先づ緩々と、旅の疲をも慰め、表に出で、酒杯を傾けられよ』と言ひすて、又表に至り、賀客の相手をなし給ふ。我は不意の事に返す言葉もなく、只目禮せしのみ。此時、坂梨なる少姉は來り、『久う振りにこそ、歸りたれ。數ふれば早や一周年。過ぐる月日のいと早さ』と言ひつゝ、單衣を我に渡し玉ひぬ。我は衣を更め、表に出で、坐を

占むれば、衆目一時に我に注がる。折こそ好けれ、『各位』と頭を下ぐれば、衆皆我に禮を返へす。我を知らざる賓客は、訝りつゝ、一圖に吾顔を見詰めぬ。此時、吾父は杯を傾けつゝ、『彼は吾家の次男なり。暑中の休みにて、只今歸省致しぬ。御見知り下され』と、語り玉へば、連坐始めて頷を解きしものゝ如く、我成長の程を喜びぬ。父は我に向て、各位に酒杯を侷めよと命じ給ふ。固より厭酒的の我なれど、父の命といひ、殊に今日は祝日なれば、其

が心を娛ましむること第一なれ。甚く酔ひたりとて、何の煩かあらんと。得飲まぬ酒も、早や二三杯を傾けつゝ、賓客に差せば、或者は我が見知らぬ程に成長せしことを語り、或者は過ぎし日の暴風に、佐賀地方の損害如何と問ひ、或者は學校の事などを聞けり。吾長姉は隣家の娘等に向ひ、「あれ見玉へ、愚弟が瘦せてあることよ。旅とは斯くまで憂きものかな」と言ひ給ひしが、近所の娘等は、感せしものゝ如く、皆眉を蹙めぬ。吾姉は尙

「歸りし折は斯くあるも、暫らく家に足を留むれば、何時しか肥え太りてよ」と言を續き給ひぬ。

我は、帯を解く迄飲み且つ食ひ、人より強ひらるゝ杯の、又酬ゆることの懶さに堪へ兼ねて、舊時の書齋に入りて、打臥したるが、酒氣いや増さりて、絃鼓の響をも耳に留まらず、何時しか夢境に入りぬ。

早や翌朝になれば、他家のものは皆去り盡して、後は吾家族のみ。我は前庭に出て、園景を眺む

るに松柏皓皜として奇石に倚り苔蒸す石燈籠
は古風を示し生ひ茂る青芝は朝日の影に露の
玉を宿し飛石の磨かれざるは訪ふ人の無きを
證し軒端の鳥雀は自由の音楽を奏し樹陰の鳴
蟬は自然の天譜を弄す聞くもの見るもの皆我
がための如し實に『塵外無何有郷』とはこれ此處
をかいふらん

嗚呼斯く幽かしき樂園此く懐かしき家郷に我
如何なれば疾く歸へらざりしぞ吾母は常に語

り給へり故郷より懐かしき所はなく父母より
親しきものはあらじと我今にして其言の眞な
るを知る我曩に歸省の日『故郷の愛』なる短文
を記せり。

『故郷の春色は今如何故郷の父母は今如何
故郷の兄弟は今如何とは是れ余が旅の空
に在る日殊に春色艶然遊意勃々禁する能
はず禽に誘はれ蝶に伴はれ覺えず節を郊
外に曳き軟風面を拂ひて桃李花暖かに凝

霞地に落ちて夕陽影紅いなるの日、青草を
座とし、緑苔を氈とし、獨り悠然思念に耽る
際、口占せし所の一片の愛より湧き出てた
る、慕郷心の反影なり。

如何なる英雄とはいへ、如何なる豪傑とい
いへ、又事に觸れ物に感ずるは、人間の通有
性とはいへ、若其故郷より羈縛せらる、一條
の愛線振動する時にありては、豈に一滴の
感涙袖を濕うすなからんや。若、一滴の感涙

其愛線に沿ひ、故郷の恩淵に注ぐものなら
しめば、余が感涙は早既に海をなしぬ。洋を
なしぬ。

* * * * *

家に至れば、兄弟は余を迎へて室に入りぬ。
酒の清冷なるは、以て積日の苦悶を醫する
に足り、肉の鮮美なるは、もて口腹を飽かし
むるに足る。父母の恩顔は、もて悒快を癒す
るに足り、兄弟の温言は、もて耳底を洗ふに

足る談興に入り酒酣なる時窓を推して彼
 方の空を眺むれば白雲搖曳する處蘇岳の
 突兀として屹立するあり山緑に水清き仙
 境の裡一抹の晚烟縹緲として飄ひくあり
 畦畔鎌を采りて耘きる農夫あり徑路柴を
 負ひて歸る樵夫あり是れ豈に輕裘肥馬に
 誇る都人士の夢想する所ならんや誰か云
 ふ鄙に樂なしと往て視よ來て見よ村落は
 神の作る所にして又神の住家なるを

と穿たずといへども眞なり。

そもや蹄輪の簇る所黄塵の漲きる所譏譽の雨
 注する所褒貶の集る所濁流滔々の熱閻界より
 出て優に聞天樂地の家庭に還らば誰か一片の
 感なからん思ふに家庭の懐かしきは競争場裡
 の失墜に陥りし人若くは千山萬河の他郷に羈
 客たる人にして始めて之を知る君見ずや遠く
 萬里の波濤を越えて酷熱樹を枯らし砂を焼き
 而かも人を熱殺する赤道直下の東印度に來り

智謀を以て、富力をもて、但しは干戈を以て、曠着、
籠絡、壓服、一億の印度土民を一律の下に従へ、碧
波、漾々たる胡母厘岬より、白雪、皚々たる比馬刺
耶山下に至る迄、其政權を擴け、前古未曾有の廣
版圖を領し、亞婆亞の城下に於て、平和の條約を
結ばしめたる苦來武も、彼が當初馬士刺斯に在
りし日は、日夜慕郷の海潮に驅られて、其平日の
傲慢不屈なる氣質にも、似合はずいと、優しき語
調を以て、左の如く故郷の親戚に寄せしにあら

ずや。

「余は故郷を辭して以來、未だ一日も娛し、か
らざるなり。……余は陳述せざるを得ず。
余は予の親愛なる故郷英國の事に就いて
沈思黙考する毎に、端なくも一種言ふ能は
ざる感情の溢れ來ることを……若しや、
幸にして予の故國而かも、予が願望の中心
なる滿質斯太を再び見舞ふことを得たら
んには、總て予が望む所、予が願ふ所は、一望

眼前に現はるゝならん。』

(四十四)

と、又見ずや、天涯孤客の身を以て、苦來武と共に、千軍萬馬の間を馳驅し、摸賀留大帝を滅し、東亞英國の大基礎を建て、而かも大不利典の擴張をもて、一身に纏ひし邊斯質貝斯も、其征馬の嘶く所、其劍戟の閃めく所、其砲聲の轟く所にありて、すら、故郷泥裂斯堡を忘れざりしにあらざや、酷く言へば、彼は故郷の快樂を得んために働きたり。抵當となりて、人手に入りたる祖先の地を

得んがため戦ひしなり。

南州翁は一代の豪傑なりき。而かも彼が競争場裡に失敗せし時は、故山に還り、犬馬を侶とし、優々以て故郷の愛を嘗めしにあらざや、あはれ韓山の孤月に袖を掩ひし、鬼將軍「三笠の山」と女々しく泣きし風流男古往今來、慕郷の心情は皆同一轍。誰か凡骨の我等が、故郷の愛を説くを以て、笑ふに堪へたりと爲すか、吾故郷には最愛なる父母の在ますものを、最愛なる兄弟の在ますも

(四十五)

の^④
を^④



第三

吾家

其一

千岐^{ちまた}の河の其末も

注ぐ所は一なるぞ。

葱^{しゆ}る喬本^{たかひ}の百技^{もへた}も。

出る所は幹^{みき}なるぞ。

其二

源^{もと}を遡^{さか}ひてたづねなば、

四海の人もはらからよ。

などか親疎の差別をば、

今世ウチノの人ヒトはたてつるよ。

其三

あな、斯く辛からき浮世をば、

塵ちりの如くに見すてなん。

吾家に老おいいる父とは、

残のこる月日を、やすめてん。

吾家は、阿蘇惟長の御子、高日兵庫頭、治部少輔、惟房第八世の裔にして、第二世、坂梨暉正入道、惟照より坂梨なる苗字を名乗りしが、吾曾祖、江藤幸衛門に至り、初めて江藤の姓を名乗るに至れり。とは、吾家に傳はる系圖によりて知られぬ。儲、吾父の骨肉を分けし者、今存生するは、三人。伯は女性にして、山口に歸き、仲は男性にして、田島を繼ぎ、叔は即、吾父にして、吾家を嗣ぎ給ふ。吾母は、郷里より一里を隔つる、高木家より吾家に縁

し給ひぬ。

吾父母の間に擧げたる吾同胞は五人。長は初め吾伯父の家に嫁せしも、一女を擧げたる儘不幸にして、所天の病死に遭ひ、今は愛娘を擁して、吾家に大歸し、隣村なる宮地町に一家を構へ、吾家の保護を受けつゝあり。

渠は、若し吾兄弟なかりせば、吾家を嗣ぐべき權利ある程ありて、父母の恩愛もいと厚かりしと聞く。渠は、面より容より、否、其氣質より、父にも母

にも似やらで、喜ぶ時は叔父に背て泣く時は伯母に近かしと、人は云ふ。我も而か思ふ。渠が、焼え上る幾多の苦煩を歴つゝも、翠の束多き其黒髪は、渠が幾多の憂苦に打勝ちし、心の雄々しさを證しぬ。今は早や、三十路の坂を越ゆれば、堅く古井の水の節操を守り、風吹くも渠が胸には波立たず、唯其一女を育て、花に飾さんことをのみ、朝な夕な、娛みつゝあるなり。

渠が愛女は、今年九歳になりけるが、未だ小學の

初級にありて、前後も別かぬ花の蒼なり、彼が父なき此浮世に、生れ出てつるは如何許り不幸の事か。彼が柳の眉を顰め、涙さしぐみて、時々父なる思ひ出に、珠を落す許りの形勢は、雨にあらざば、涙なり。彼は定めて悟りつらん、讀本の開卷に、『父母』なる語の讀まれつるを、彼が標梅（しほばな）になりて、落さん涙も、其家に歸りて、『父』よ『母』よの復習をなす時、母の心に、人知れず降る雨も、孰れおさく、劣らざらまじ。彼を見るもの、暗涙を流せば、

彼は無邪氣にも『何ぜ』と問ふ。

次は、吾家兄にして、一家の幸は皆、彼が身に纏はる。彼が寡言にして、思慮深き所は、酷く父に肖て、心の曲みなきは、母に劣らず。彼は我より十二の長兄なれば、我が小學にありつる頃は、我等の助教師なりき。彼が餘り性急ならざる氣質と、親切なる恩言とには、人皆師として服従しぬ。彼が吾村にて敵なきも、皆之がためなり。我が氣質といと投合したるは、吾家の仲姉。彼は

當時、宮崎なる坂本に嫁す。我が在佐の日、美々津なる姉上の許に投せんと思ひしは、即彼のこととなり。此二三年來は、路遠ければ逢ふことも得せで、我は彼の事のみ懐かしく思ひぬ。彼が邪心なく、淡泊にして吾同胞に牆を隔てぬは、其人より愛せらるゝ種子なるか。彼が氣質は、吾家の祖母に似て、祖母の在世の時は、只掌の中の玉なりしとぞ。人は言ふ、彼が人の苦痛を慰め、人の忿怒を和らげつゝ、上下隔てなく人を待遇なすは、醫家

の妻には好適なりと。彼今は助なき他人の裡にありて、人命を救ひつゝも、人を相手として浮世の生活をなしけるが、殊に彼が産み落したる二男一女は、如何許り彼が身を羈絆すらん。左れど亦、彼の爲めには旅空の慰藉者ともならずや。彼が良人の短氣を和らげつゝ、傳つき、貞操を守る所は、我、彼のために誇らざるを得ず。吾姉の中にて、いと目出度かるべきは少姉なり。我は、幼時山口なる伯母の戯談を聞けり。『少姉は

吾家の小町なり』と。彼は固より眉は遠山の霞を
 畫く、的の美人にはあらねど、比較上吾二姉に過
 ぐれたる容色あるは、我が斷言する所。彼が唇の
 薄紅なるに、櫻色を帯びたる頬の其邊に細く幽
 かしき靨の立つは、只愛嬌を溢す許りに見ゆ。然
 れども、是はこれ彼が二八の花盛りの頃にして、
 吾父母が最後の花嫁として、他家に嫁せしめたる
 當時の事なり。今は彼も二人の男兒を擧げた
 れば、昔日の紅顔も幾分か衰へて、我が烏羽玉の

黒髪も、稍櫛目を遠かりて見ゆ『人百日好なく、花
 千日紅なし』とは、今吾少姉の上に證せられぬ。
 我は七歳の時、小學に入り、十六にして熊城に出
 で、昨年の春、佐賀中學に轉じ、早や十有九年の春
 秋も、學びの海に委ねつゝ、何時樂みの隙もなく、
 學びの波に漂はされ、暑毎々々に歸省はするも
 の、五十日より多く父母の膝下に在りしこと
 なく、父母の我を思ひ給ふ心は、他の兄姉よりも
 薄かるべきに引き換へて、一家の恩愛は皆吾身

に注がれ、我は他郷に在りては、一個の『食ひ且息ふ』動物に過ぎざるも、家に歸りてはエデンか但しはパラダイスの小王の如く、愛せられ、又敬せらる。

斯くまで、父母の恩愛をかけ給ふに、我如何なれば無心に過ぎしぞ。早く出世して、父母の心を娛しましめんと思へど、我も亦少しく志す所あれば、大器晩成を説きつゝ、父母の心を慰むるも、吾心悲なき能はず。

我は聞けり、『吾祖父母の時代には、吾家も當時の吾家にはあらで、家計も豊かならざりしが、吾父母の時代に至りてこそ、吾家の領地も財産も廣まりしか』と。思ふに、吾父は吾家中興の君主にして、吾母は吾家の女王なり。實に吾父ありて吾家の富は興され、吾母ありてこそ、吾家の富は守らる。彼等が、我等五人の同胞を、多忙なる農家の裡に育て上げしは、如何許困難の事なりしよ。此數年來は、農事を止めて、唯氣の儘に世渡をなし

つゝあるも、彼等は早や、六旬に近ければ、前途の望も薄く、彼等が日夕忘れざるものは、唯我が出世の事のみ。天よ、我は祈る。願くは吾父母の命をして、鶴よりも否、龜よりも長からしめよ。

吾五人の同胞の内、今や三姉は縁定りて、吾家には父母と家兄と、二人の僕婢あるのみ。我も亦他郷の人の如く思はれて、避暑に歸へりし時の外は、吾家の家族に加へられざるなり。家兄は曩に、妙齡の嫂を娶りしが、渠も不斗したる事より、其

親里に大歸しつれば、稗を抜きて、吾家の族は三人なり。

或日のこと、父は我等に物語り給へり、『我も斯くまで老いたれば、前途の望も無し。唯汝等が辛き浮世を渡りてこそ、父母の鴻恩をも感ずれ。諺にも、子を産みて知る親の恩と、實に斯の如し。世は唯、一場の夢に過ぎず。相成るべくば、若き時に稼きて、老後の樂を期すべきぞ。斯く迄、汝等を育て上げし上からは、最早心に残る事はなし』と、喜び

の涙を目に浮べ給ひぬ。我は、不圖父の顔を見上げしに、彼が笑顔も亦、涙多かりき。父よ我は謝す。父の五十年の辛苦艱難、吾等の爲めにあらずして、其れ將た誰の爲ぞ。彼、自ら辛苦の程を口にせざるも、彼が額に形はれたる皺線の數多きは、問はずして其苦心を證しぬ。彼、今康すこやかなるも、老いの霜は早や其頭上に降りぬ。我は、其顔を眺むる毎に、轉また暗涙を呑みにき。父は吾伯父とは異なり、其幼時にありても學ばざりしなり。否、學ぶに

暇無かりしとかや。彼が學力は、貸金の出入を記すに足るも、彼が算用は、加減乗除に止るも、只一時の間に合せにして、深く師に就いて學びしにもあらず。唯農事の餘暇に學び得たりしものなれば、彼が區長を務めて居りし時も、種々の迷惑は、彼が胸に迫り、彼が身の上に鑑みて、家兄へも、我にも、幾多の資金を抛ちて、學ばしめしなり。我嘗て郷に在るの日、父は我に語り給ひぬ、「元吾等が汝に勉學せしめしは、敢て汝をして官吏たら

しめ。學。者。た。ら。し。む。る。の。意。思。に。あ。ら。で。唯。汝。を。し。
て。朝。に。官。府。の。令。文。を。讀。ま。し。め。夕。に。毎。日。の。新。聞。
を。誦。せ。し。め。之。を。樂。し。む。心。底。な。り。し。』と。我。は。暗。に
喜。び。ぬ。我。元。來。不。肖。と。雖。も。今。や。父。母。の。高。望。に。適
ふ。を。得。と。あ。ゝ。彼。等。が。今。後。の。餘。命。こ。そ。我。が。彼。等
に。報。ゆる。日。と。は。な。り。ぬ。れ。左。な。き。だ。に。歳。月。は。人
を。待。た。ず。我。豈。懋。め。ず。し。て。可。な。ら。む。や。

第四 七姪

其一

いろは句へど散ぬるを、

まいて、ひらかぬ蒼さへ

吹きも敢なん吾が姪を、

聞くぞ哀しき秋のよへ

其二

わが世は誰か常ならむ、

草葉に宿る白露と、

撰ぶことなき道をふむ、

哀を知らぬ無常人。

其三

うるの奥山、けふこえて、

捨て、ぞ、塵の浮世をば、

天の樂土を、ゆびさして、

いそぎ逝きけん吾姪は。

我、生れて十有九年、幸にも曾て、吾族の喪に遭ひしことなく、未だ眞の『死』なるものゝ、如何許り悲しきやを知らざりしが、今年、陰曆七月十日の夜、端なくも宮崎なる、吾姪の訃音に接し、初めて心から、無限の涙を濺ぎぬ。

此頃は空模様何となく悪しく、夜もすがら、降り續きたる雨さへ止まず、静けき吾山里も、一入淋びしくて、轉、無聊の感をぞ催しき。父母と我とは、暮方より早く伏戸に入りたるが、何とやら心苦

しくて、目を開き乍ら夢を見ること屢々にして
猶心安からざりけり。

折しも夜の最中に至り、『電報々々』と戸を叩きて、
呼ぶ聲聞ゆ。我は何處よりの電報ならんと急き
起き出て戸を推せば、配夫は我に一封の電紙を
渡して去りぬ。我は急がしく、燈の下にて披き見
れば、思はざりき。是なん、吾愛らしき姪の腦病に
て、今夕死せりとの訃音ならんとは。我は驚愕悲
嘆の餘、涙も出でざりしなり。父母も我が讀み下

す文面に驚きて、床を出で玉ひ、一場の嘆は初ま
りぬ。

遂に行く道とは兼て聞きしかど

昨日今日とは思はざりしを

誰か思ひたりけん、吾最愛なる六才の姪が、今夕
黄泉の客とならんとは。我は再び讀み返し、始め
て已に歸り、溢るゝ涙は袖を濕しぬ。
あゝ心づくして育てつる女郎花も、唯其誓を見
せたる程こそあれ、一夜無情の嵐に誘はれて、呼

びて歸へらぬ黄泉の客となり了んぬ。吾姉上の
悲哀如何許ぞ。天命既に數ありと雖も、彼が涙を
し涙の川も、一時は瀑をなしつらん。頼み少なき
他人の裡にありて、今日の今宵を如何泣き暮ら
すらん。思へば、吾涙も彼に劣らざりけん。
母上は、涙を拭きつゝ、佛壇に至り、香を焼き、燈を
點し、鈴打鳴らし玉へば、何となく一家しんめり
として、其夜は吾等も通夜しぬ。
是はこれ、我等が訃音に接せし當夜の状況なり。

尙、彼は生れて我家に養はれ、天性敏く、一を聞いて十を知るが如く、加ふるに十に過ぐれたる容
色もありければ、吾家の者も、皆未だ開かざる花
の苔として愛でしなり。我、曩に在郷の日、『四百餘
州』の軍歌を教へし時に、彼は當時、八才になる吾
長姉の女よりも、迅く覺えて、他の者と連れ合ひ
に唱ふる時、他者の打忘れたる所は、彼自ら謂て、
其處は『國難此處に見る』、此處は『心筑紫』とか、指
し教へしことさへあれば、今も尙其愛らしき口

元の、但しは其美はしき面影の、眼前に髣髴たる、ぞ、忘れ難き。

人は皆稱しぬ、『瓜の蔓に、茄子は、ならぬ』と。彼が其顔容の父に肖て、其氣質の母に似てありしは、彼が近所の處女等に寵愛せらるゝ基なりしなり。彼が四才の折、父母は彼を吾家に遺して、宮崎なる美々津に移りしにぞ、彼は祖父母を、其第二の父母の如く思ひて、美々津なる眞の父母の事は、噂もせざりしのみか、宮崎といふことさへ大厭

ひなりしなり。其泣く時も、美々津に送るとさへ言へば、直に泣き止む程にて、如何に吾父母に懐きしやは、之を想ひても知らる。否、彼は吾家を眞の故郷とこそ、思ひつらめ。彼が美々津に送られしは、去年の冬なりき。寒風肌を刺すが如き日、驢馬に乗せられて、送られし時、『往きたうない』と叫びしとか。嗚呼、其時留め置きしならば、斯かる愁には遭はざらましものを。今は、唯、後の悔となりぬ。

(七十四)

嗚呼、吾愛らしき姪よ、汝は今何處に迷ふらん。我
曩に在佐の日、汝が許に投せんと企てしも、僅か
の障にて止めぬるも、今更思へば、腸を千々に斷
つが如し。

吾亡き姪よ、汝は早く達觀しぬ。此塵の浮世を懶
さしと思ひてこそ、見棄てたらめ。噫、我遅かりし
か、但しは汝早かりしか、親しき父母も後に見て、
望ある身をも惜まらず、今は早や黄泉の下、冥途の
旅寓に眠るらん。穩に眠りて、安く逝け、紫雲翳ひ

く九重の瑤の臺の其中に、幽かしき神は、早や手
を開きて、蓮華の上に、汝を飾さんと俟ちつゝ、あ
らん進めよ、姪よ、安く進め、嗚呼、汝が親しき叔父
は、何れの時か、汝を追ふべき。

(七十五)

第五、 秋望

其一

飛ぶ鳥さへも歸來て、

孤雲つれなき雲も早や去りぬ。

夕日のかげも納りて、

東あづまの空に月は出ぬ。

其二

かりほの稻の其田より、

歸る翁の影も見つ。

野路のの草葉の叢中しつかより、

歸る牧人まきびと歌みつ。

其三

見渡す限り秋のいろ。

照る月影もひとしほに、

隈なく渡る黄金こがねいろ。

あな、われ老いん此里に。

我は一日故郷の晚景を眺めんとて、夕陽將に西山の端に春かんとする頃より七才になる吾甥を携へつゝ、箆を郊外に曳きぬ。

時は好し、恰も八月の既望、都にては尙浴衣を着ぐる候なれど、田舎の秋色は早や、稻の葉に登り、冷風颯々、涼しといはんよりは寧ろ冷かなり、門を出づれば、前へに九州火山脈の一派たる阿蘇の五岳、今は夕立の雲霽れて、殊に晝間よりも歴々として見られぬ。西に峙つは杵島岳、烏帽子を戴く

が如きは烏帽子岳、中央に蹲るは中岳、其左に方りて、最高峯をなすは高岳、最東に聳え、宛も鋸齒の如き觀をなすは猫岳なり。連山皆、豊後の文珠山、涌蓋山等より其派脈を通ずるものにして、絶えず其頂より黒烟を吐きつゝあるなり。我が疊に歸省の日も、雷の如く鳴動しつゝありしが、又折々は其噴火口より、火焰を吐くことさへありて、

ほのほ見ゆ人の家にはあらぬかと

窓推し見れば阿蘇の山あれ

と戯むれしこともありき。其焼え上るものは唯、
烟焔のみに止まらず、時としては、ま霧を降らし里
人を害することさへあるも、皆里人の尊ぶ所に
して、壽安鎮國山とまで稱へらる。

縷々として起る烟の南に、ま霧ひく時は、晴天を示
し、黒烟北に靡ひく折は、降雨の前兆を現はし、ま霧
氣未だ凜しからぬ初冬の候にも、早や雪を帯ひ、
薰風緑を拂ふ晩春に至りても、猶消えやらで、其

高を證しつゝあるなり。

前岳後峰、左山右巒脈々として吾四邊を繞る、ま霧
岳の麓より流れ出づる一條の谷川は、漠々たる
平田の間を流れ、無限の恩澤を里人に與ふ。尙餘
あれはこそ引かれては池溜の水となり、幾多の
魚介を育て、或は流れて無数の水車をも回はず
めれ、雨降れば河身豊に、運び來る泥土に、田畑を
埋むるは、吾里のチイル川とも云ふべきか。
暮色愈近づけば、衆鳥高く飛び盡して、孤雲獨去

(八十二)
りて間なり古寺の鐘聲林外に盡きて野渡の柳
色淡煙の中に蔽はる槭樹疎らに點綴する小隄
の外殘照微かに反映する閑谿の間に孤村の遠
影は見え又隠る丁々たる伐木の聲も何時しか
絶えて薄暗き煙の幙は小山の麓を掩ひ彼方の
小蔭に星かど見まがふ計りの燈の幽かに閃め
くは今しも里人の歸り來たるにやあらん時を
争ひし小鳥も小枝にそよぐ涼風にとれて何時
しか夢を結びけん静まりて聲もなし溪邊に釣

する更もどく歸り去りて殘されし小舟のみ漣
漪に弄はる計古き社の傍へより犢の聲の聞
ゆるは秋草摘む童子の我家を指して急くなら
ん晝間の暑さに蒸されて蒸みたる草葉も今は
玲瓏たる白露を飾ざして水晶の珠を連ねたる
が如く裳に觸れてはばらりと落ちぬ黄昏の煙
もいつしか風に吹きやられて堤の上に生ひ茂
る老松の間より一輪の明月皎々として輝き渡
り我を迎ふるもの如し小川に沿ひて溯れば

蘆間を潜ぐる流水の岩にせかれて響く音嬌女
が奏つる琴の調に似ていとゆかしく草葉の蔭
に熒々たる螢の僅に夏の名残を留め明日無き
露の命を寄せぬるも感應力の敏なる我がため
には又涙の種なりけり。

十六夜いさよひの月早や缺けぬと眺めても芭蕉翁の『十
六夜は僅に闇の始かな』をも思ひ出され哀を増
すのみ『古今集』にも『露をなど仇なるものと思
ひけん我身も草に置かぬばかりを』と誰か百歳

の壽を保つと期せむや謂ふ勿れ人生は五十と。
孰か少者天し長者存し強者歿し病者全しと謂
はんや。人生は唯朝露に髣髴たるものを。若しや
無情の嵐吹きもせば。なか其老少を撰ばん。『未
の露も本のしづくや世の中の後れ先だつ始め
なるらん』とは僧遍照の至言なり。我誤ちて智谷
に陥いり此悠久なる樂郷に永く足を留むること
を得ず。數日の後に去らざるべからざるを思
ひては轉た歸路に迷ひぬ。『數日の中に幽かしき

此處を立出て、浮世の空に迷ふ、我が運命の如何計り拙きよ、せめて浮世の此郷にもかな』と流るゝものは唯、川のみには非ざりしなり。水村山郭、月下に静まり、時々吠ゆる遠犬の聲と折々嘶く匹馬の音に、静なる谷間も亦山彦を反しつゝ、一入懐氣を添へてけり。

偕も、此幽谷の中に住する里人の如何計り多幸なる。彼等の家には電燈なきも、尙暗からず、時計なきも不自由を感せず。彼等の身には、錦繡の美

服なきも恥とせず。山海の珍味なきも、飢となさず。規則なければ、壓制さるゝこともなく、夜早く寝ねて朝疾く起き、息はんと欲する時に憩ひ、食はんと欲する時に食ひ、働かんと欲する時に働く。學ばざれば、忘れもせず。罪てふものなければ、法律も何の用かは。都人の胸字は、一日に幾度陰晴を経つゝあるも、彼等の胸字は、夕立の外、谷風の外、喧がさるなり。都人の多忙なる時に、彼は閑なり。涼笛の聲、電車の響は、都人の驚夢を破ぶる

も、彼等、は、夜、半、ば、なる、谷、川、の、聲、但、し、は、水、卷、く、水、
 車、の、響、に、悠、々、と、し、て、華、胥、の、郷、に、遊、び、つ、い、あ、る、
 な、り、都、人、が、狂、言、に、浮、か、れ、出、づ、る、時、彼、等、は、村、女、
 の、手、踊、を、見、て、興、じ、都、人、が、葡、萄、の、美、酒、に、高、樓、に、
 醉、ふ、時、彼、等、は、手、製、の、濁、酒、に、賤、が、伏、屋、に、醉、ひ、つ、
 い、あ、る、な、り、都、人、が、洋、琴、を、聞、く、時、彼、等、は、自、然、の、
 調、ぶ、る、松、風、の、音、を、聞、き、つ、い、あ、る、な、り、都、人、が、悲、
 ぶ、時、彼、等、は、喜、び、つ、い、あ、る、な、り、嗚、呼、彼、等、は、手、か、
 ら、種、え、て、自、ら、食、ふ、日、出、で、い、耕、し、日、入、り、て、息、ひ、

井、を、堀、り、て、飲、む、『帝、力、我、に、何、か、有、ら、ん』と、は、此、長、
 閑、な、る、山、奥、に、住、す、る、彼、等、に、非、ず、し、て、夫、れ、將、た、
 何、れ、に、か、あ、ら、ん、人、は、謂、ふ、鄙、は、匿、れ、家、な、り、と、然、
 れ、ど、も、我、思、ふ、に、何、ぞ、必、ず、し、も、競、争、場、裡、に、失、敗、
 せ、し、人、に、の、み、限、ら、ん、凡、て、平、和、を、愛、す、る、人、恩、愛、
 を、思、ふ、人、德、義、を、重、ん、ず、る、人、但、し、は、自、然、を、愛、す、
 る、人、は、皆、此、里、を、羨、む、な、ら、ん、な、ぞ、や、彼、等、の、譏、譽、
 は、一、郷、に、止、ま、り、彼、等、の、褒、貶、は、一、村、に、限、り、而、か、
 も、彼、等、の、四、邊、に、は、自、然、の、恩、愛、溢、れ、つ、い、あ、る、も、

のを。

雨降るも彼等の爲めには神の作用なり。雪降るも、彼等の爲めには神の作用。四季の循環、寒暑の交代、晝夜の冥合も、彼等の爲めには神の作用ぞかし。天氣朗なる夏の日、鳴き渡る蟬も、彼等の爲めに、自然の音響を調べつゝあるなり。秋半ばなる晴朗の朝、草葉に宿る白露も、彼等の爲に、自然の『無常』を示しつゝあるなり。手から種める早苗の丈高くなりて、何時しか秋の風吹き初むるに

(九十)

至れば、穂に登りて、下葉色づくに至るも、彼等は之を神の作用に歸す。太陽の東より出て、西に入るも、彼等は神の作用に歸す。月の盈虧、潮の干満も、亦神の作用に歸す。凡て目に視、耳に聞く所、森羅萬象、彼等は皆之を神の作用に歸せざるは無し。理學なく、化學なく、天文學なく、植物學なし。』
そも、彼等が云ふ所の神とは何ぞ。氏神か。村神か。否々、然らず。目に見るべからず、耳に聞くべからず、手に捉ふべからざる、玄妙不可思議なる、凡て

(九十一)

彼等の作用を爲す而かも彼等の所謂天竺^①上天^②の意に在ます最敬なる幽神に外ならず。

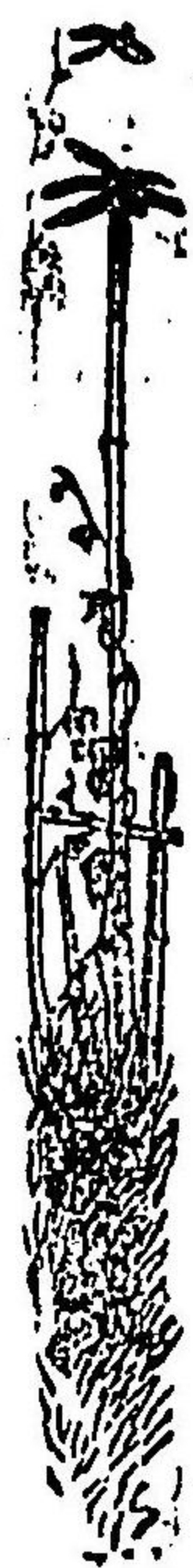
夫れ羅馬の府民は、ハツリシアン、プレビヤンなる二族に分かれ、世を終へ代を交ふる迄相軋せしことあるも、必竟貧富の隔絶甚しく、其國恩に浴すること、差異ありしを以てなり。文理を解せし羅馬府民に於てすら、而かありしなり。

今、吾郷は長を敬ひ、幼を扶け、緩急相救ひ、業を勵み、義を重んじ、凡て平和を旨とし、一郷一村、上下

隔絶なく、平等一様に君恩に浴しつゝあるなり。彼等、忠君愛國の理は解せざるも、不知不識、帝の規に隨ひて、之が應用を爲しつゝあるなり。學んで百惡を爲さんより、學ばずして一善を爲すに勝る幾許ぞ。

彼等既に斯の如し、學ばざるも亦、何の煩かある。飛鳥川の淵は、一日に幾度瀬になりつゝあるも、あだし野の露宵に結んで朝に消ゆるも、内地の雜居は何時行はるゝも、條約の改正は如何に結

ばるも此悠久なる山里に住む郷人にありては
夫れ將た何の關する所ぞ見よ此山里の天地は
山長へに縁を帯びつゝあるにあらざや我曩に
は都府を慕ひ都人を羨みしも今ぞ始て吾故郷
の天然故郷の樂園を愛する念を起しぬいざや
此郷に我も永く老いなん吾親しき父老と共に



第六

吾

其一

如何に月日の速みなる

長閑き春も早や去りて

雁鳴きわたる秋となる

夢路に我を置きすてて

其二

三十日の夢もはや覺て

今日ぞ首途かきでの日とはなる。

親しき父母も後に見て、

明日は、みそらの人となる。

其三

ち。さ。の。道。も。ひ。と。さ。と。と。

撰ぶことなきものながら、

五十いそすせの内も早、二十はたとせ年と、

なみに越せしぞ海うみのはら。

故郷三十有餘日間の吾は、實に夢にてありしなり。我は、或時は山に登り、或時は野に出で、或時は水みづ夕山瀑布の幽水に骨を冷し、或時は高城たかきの墟趾を吊ひ、或時は漠々たる波野なみ夕原に放歌し、或時は小嵐こあらしの静波に釣し、或時は月を眺めなどして、出来るだけの快樂を盡せしなり。然れども、亦或時は幽室に籠り、或時は思念に耽り、或時は追懐に陥いり、或時は苦慮し、或時は心配し、或時は悲み、或時は泣きて、斯世に有らん限

りの悲愁は嘗めしと思はる。快悲哀樂彼此酌量し來たらば其得失果して幾許ぞ。我は思ふ唯其健康を得しことのみこれ我が避暑の土産なりと。

避暑の本色若身軀の保養にありとせば我は最早其本分を全くせしかば憾む所更に無し。保養の道種々ありと雖も若山野に放浪するを以て最とせば我は最早悔ゆる所無し。然れども是はこれ有形上の保養なり吾等學生にありては尙

進んで無形上の素養を爲すことも肝要なりとす。無形上の素養とは何ぞ。精神的の涵養是なり。精神的の涵養とは何ぞ。故山の秀靈に對し天然の美を無にせざること。是なり。天然の美を無にせざるとは何ぞ。自己の眼球を玲瓏にし其影する所の萬象を一圓にして筆に寫すこと。是なり。其眼球を玲瓏にし其反應力を敏ならしむるには又多少の所要あり。學識を高くし見識を尙めざるべからず。學識見識兩ながら高尚にするに

は、又多少の所要あり。兼好法師は云へり、

『獨り燈火の下に書をひろげて見ぬ世の人
を友とすることこそよなう慰むわざなれ書
は文撰のあはれなる卷々、白氏文集、老子の
言葉、南華の篇、此國の博士どもの書けるも
のも、古へのはあはれなる事多かり。』

と、其當世の道に合ふと否とは暫らく置き、其順
序斯の如きは敢て疑はざる所なり。我悲境に陥
いりし時も、我を慰めし所のものは、故郷の愛の

外、自然の美の外、唯數卷の書冊にてありき。興に
乗じて讀む時は、覺えず夜を更けらし、食事を忘
るゝことさへありつるが、父母は屢、我を責めて、
書物狂人と宣のたまひつるも、理ことわりなりけり。然れども、是
はこれ、折々の事にして、吾家無人なりければ、我
は朝夕、母が薪水の勞を扶け、時に或は、菜園の草
を抜き、園丁の代をなせしこともありき。破窓の
底、瘦燈の下、古をいたみ、今をはかなみし、我等も
鍬を采りたる時は、宛然、無邪氣なる一農夫に、

へりしなり。

(百二)

我、或時は村童と力を角せしことありけるが、角力は元是れ體の重心を兩足の外に移して、仆すものなれば、我は兼て修め得たる柔術を以て、我よりも大なる男を、土上に抛ちしこともありしかば、人我が力の大なるに舌を卷きしも、我力左ほど大なるにあらず、唯其術を應用せしに過ぎざりしのみ。

我は又、吾村の青年會に臨みし時は、吾村青年會

の一員なりしかば、都にては濱の眞砂に等しき我ながらも、忽ち副會頭の椅子を占めしなり。彼等は桑を説き麻を論ずる丈の能力こそあれ、未だ衆人の前に立て、一定の學理に基き、自家の胸臆を述ぶることは得出來ず。我が屢、演壇に登り、風雨の説、雷鳴の理、寒暑の交替、及霜雪の原因等、總て彼等が知らざる所のことを、説き聞かせし時、彼等は半ば疑ひ、半は信じ、吾智神よりも高志など稱めそやしたる事さへありき。然れども、十

(百三)

年前とは違ひ、吾郷にも、今や電信局さへ設けられ、又時々には旅行して、火輪鐵車に乗りし者も少なくなからねば、彼等の智識も見界も幾分か進歩して、其理を説くにも、説き易かりしなり。我が斯く、雷鳴の理を説きつゝある際にも、驟雨沛然として來り、霹靂一聲、耳を穿ちし時は、衆皆首を縮め、いと恐怖の摸様見えしも、亦抱腹絶倒。

或時は、村内の父老兒女に招かれて、暮方より月光の下に、彼等の爲め、深更まで種々の稗史小説

を讀み聞かせしことありけるが、彼等は殆ど文字を解する者の如く、我讀んで、『太功記』の武智光秀が跌宕なる眞柴久吉が豪邁なる所に至りては、彼等膝を叩いて感嘆し、『傾城阿波鳴門』の母子相逢ふも名乗る能はざる所に至りては、皆涙を呑み、父其女子を殺し、母の歸り來りて、眠りたるが如き死骸を撫づる段に至りては、一層時ならぬ時雨を催し、『阿漕浦』の平治が住家而かも、忠孝の功著しく表はるゝ所に至りては、『忠孝』なるも

の、忽諸に附し去るべからざるを感じ合ひ、『白石齋』の新吉原段に至りては、遙に骨肉の情愛割き難きを悟り、『菅原傳授』の『梅は飛び櫻は枯る、世の中に何逆松はつれなかるらん』に至りては、武士の流石は未練無きことを感じ、鳥部山に送らるゝ其亡子を思ひては、頭を擡ぐる者さへなく、『朝顔日記』、『お俊傳兵衛』を讀んでは、人情の濃きを達觀せしものゝ如く、且笑ひ且喜び且悲む、嗚呼我が讀む所に隨て、且笑ひ且喜び且悲む、これ

抑も我が讀方の巧妙なるによるか否然らず、作者の筆真に迫れば也。

あはれ人間一生の事は又十年の事の如し、十年の事は一年の事に似たり、一年の事又一月に如かず、我が避暑僅々三十日間、其爲したる所を約すれば、且食ひ且憩ひ且眠り且笑ひ且喜び且哀むに過ぎざるなり、我避暑中の出來事總て斯の如し、我生涯の出來事も亦知るべきのみ、『歲月人を待たず』我が首途も早や今日となりぬ、思へば

唯一夢の如し、筆を投じて茫然。

(百八)

* * * * *

佐賀市妙安精舎樓上より

秋の田の刈穂を眺めつゝ記す



筆の掣

(一) 田舎の四季

春

霞やう／＼細やかなる頃、幼き童を携へて、山路をそいろ歩きするいと幽かし。山藤草花などのいやに艶美なる、鶯の喃々と鳴き渡るなど、見るにつけ、聞くにつけ、娛心の種ならぬは無し。歸るさに、山躑躅の花など、手折りて持ちかへる。最と

(百九)

心地よし。

(百十)

夏

夏は春よりもいと勝りてゆかし。金をも爍かす如き祝融、早や西山の端に納まりて涼しき川風の谷間より、颯と吹き來る快さ、何にか譬へん。晝間の暑さに、眠りし如き草葉も、今は勢を得て元の緑にかへり、濃かなる葉末に、露の玉きらり々々と點綴する、妙味は唯、つかの間なり。漸く暮れはて、谷川の邊を飛びかふ螢の光、一入勝りて、輝

くも、涼しき心地ぞする。あなや、自然が造れる山里の風景は、とても筆紙に盡すべくもあらず。如何なる畫工も、田舎の景を寫すには苦むとかや。哀れ、天然の萃は田舎の寂びしき夕景にぞあらはるゝ。郭公の聲、茅蜩の音も、聞くにつけて興多し。

秋

『山里は秋こそ、殊にむびしけれ。鹿の鳴く音に目をさましつゝ』と。忠岑の咏めるも山里の秋夜を

(百十一)

寫したるもの。唯にさのみかは、『女郎花多かる野邊に宿りせば、あやなくあだの名をや立てなん』と。小野のよしきの君が、歌ひしも、まこと眞を穿てり。芳多き草花も、何時しか枯れて、木葉はふれたる頃、只優にやさしき女郎花の、鮮かなる貌をあらはしけるも、宛然野邊の景色。貫之の『白露もしぐれも、いたくもる山は、下葉のこらず色づきにけり』も、満山黄ばみ渡れるけはひ、何處も同じ秋の夕暮と、いふが中にも山里の風景掬すべき

もの多し。

冬

物のあはれは秋こそ勝されど。人毎にいふめれど、秋ばかりが、哀れなるものにもあらず。『山里は冬ぞさびしき勝りける。人めも草も枯れぬと思へば。』満山色衰へ、寒風枯梢を音ふ時、或は一夜に銀世界と化したる時の、冬の景色は、をさく秋にも劣らまじ。

(三) 郭公

『郭公啼くや田舎の山の端に』

郭公の啼くや、蓋し田舎の山に於てす。去る年の夏、避暑に歸省せしに、既に晩夏となりつれど、尙郭公の聲を聞けり。都にては、郭公々々といと愛づれど、田舎にては、左のみ思はず。聞き度くなきほどにも啼き渡るぞかし。哀れ、郭公も都にありたらんには、如何に佳人才士に愛賞せらるべき

に、其幽かしき妙音を齎らしながら、可惜、空しく田舎の松風と和し去るは、如何なる譯ぞ。田舎とは斯くまでよき所なるか。郭公よ、何が故に其愛づる人にはつかずして、之を疎ずる人につく。嗚呼、都は懶さしや。

(三) 園内の夜色

一天藍の如く青み渡れる天空に、萬里を照らす明月の、只寒しげに懸る宵。獨、園内を逍遙するに

淡烟の幕は若松の梢を閉し、千歳を老る常盤樹の、緑滴る其様は、世に『無常』なきを示すが如し。左れど踏み行く、芝生の枯れたるを見ては、早やつかの間に秋の來りて、人生の常無きを示すものゝ如し。あはれ此樹此草、なか斯ばかり、常あるが如く、常なきが如く、人を迷はしむる。思へば我も、夢の浮世を過ごせしこと此に二十年。爲すこともなき此の吾身。何時かは昇る雲井の空、あなや果敢なし人生はど、歩を進むれば、皎々たる明

月も、村雲に蔽はれ、儘にならぬ浮世の譬へも、吾心を動かして、種々の聯想は、單純なる吾心を攪亂しぬ。あはれ宇宙の美を觀する詩人よ。何ぜに此の幽かしき秋月を歌ひて以て其美觀を添へざる。あはれ、宇宙の美を寫す畫工よ。何ぜに來りて此美はしき、幽かしき、偉大高尚の夜景を寫さる。ゴルドスミスを地下に呼ばんかな。過ぎし昔のアーピングを。雲の彼方に呼ばんかな。今夕今時の吾心情。我は自白す。儘に絶潔絶美一點の雲

なきを。敏き筆もて寫さまほしき吾心情を併せて此夜色をこそ。

(四) 山々

朝に笑ふ龍田山。夕に迎ふ金峰山。皆之れ吾が永久の友。突たる尾剝山。兀たる阿蘇の峰。皆是吾が親しき故郷の山也。山の愛すべきは他にあらず。其自ら歎かず。但しは人を欺かざるにあり。自然の風景。天然の美觀。誰か得て之を穿たん。山は即

ち之を泄しつゝある也。昔より云ふ。智者は山を愛し、仁者は水を愛すと。山の泰然として動かざる。智あるが爲めにあらずや。水の流れて止まざる。何ぞ其れ仁者の仁を施すに似たる。我、智者にあらず。又仁者にあらぬと。山の愛すべき、水の親むべきは、即ち之を知る。他無し。是れ其自然の美を具へて、千歳易らざるにあり。

(五) 朝霞夕烟

朝起きて、園内を散歩するは、吾が一の課業となりぬ。朝の霞、夕の烟、我は此二者を以て満足す。朝霞深き所に認むる山村、夕烟薄き所に望む山廓。宛然是畫中の畫たり。朝寝を貪る我が、此頃人に先ちて朝起きするも、此景あるがためぞかし。無風流の我、人の散歩せざる時に獨歩して樂むも、此景あるがためなり。あはれ朝霞夕烟、我は汝が永久の友たらん。

(六) 七夕

今日は七夕なれば、手本をも書いて下されど、甥どもの來りて責むるにぞ、久しく執りたることもなき筆を執り、『七夕、あまの河』などの文字、四五字染めてやれば、小供心のあどけなき、嬉し相に持て行く。あはれ小供の時分は、七夕といへば、斯ばかりも嬉しかりつるに、今は左程感ぜられず。反つて歲月の流るを恨むのみ。何事も斯の如し。

(七) 食後の散歩

晝間の暑さも何時しか失せて、涼しき風は街柳の梢をゆらくと揺かす。食後の樂みとして散歩するに、今宵は中將姫の祭とか、何時になき賑合なり。往ものあれば、來るものあり。街の兩側に列る露店には、女の聲して『おは入りく』といふ、蓋し客を争ふ商人の腕前なり。呼ばるゝままに、玻璃の暖簾を掲げて入れれば、赤き毛布の其が上に、

烟草の盆も備へあり。『何を召し食る』と問ふにぞ、『白雪』をといへば、暫らくして、年は二八か憎からぬ、島田鬚の乙女子が、其肌よりも尙白き雪を、朱塗りの圓盆にのせて、持ち來るもいと幽かし。未だ喫せざるに、心骨ために寒く、一度之を口にすれば、晝間の暑さも何時しか忘れつ。あはれ、此氷あらば、我は如何なる暑さも嫌はじ。

(八) 橋上の月

昔は源公融橋上の月をめで胸中の鬱を散せし
とかや。あはれ橋上の明月ほど幽かしきものは
あらじ。明午橋邊、白水潺々たる所、空に浮かれし
月を眺むるに涼風颯と來りて衣袂を拂ひ、水波
澹々たる所には月光閃めき、珠玉を弄する如く
將た水晶の玉を碎くが如く、其景得て言ひ難し。
夏日の暑さも、此景なくば堪へられまじ。苦中に
も亦樂はあるらめ。

(九) 庭前の百合

花の中にも百合は何となく氣高くして、自ら
姫君然たる風を帯ぶ。幹長くやせて頂に紅なる
花房のゆらりと咲けるなど、宛ら幽園の姫君に
似たり。風吹けば堪へ兼ねて、頭重げにし、垂る
様。丸で人に遜るが如し。昔より百合に姫百合な
ど、名を附せしも、大方は其貌の、姫に似たるに
よれるなるべし。

錦
堂
菊

明治三十六年四月廿六日印刷
明治三十六年四月廿日發行

○○○○○
錦 堂 菊
○○○○○

複製
不許

著作兼
發行者

東京市神田區維子町卅番地

戶田爲次郎

印刷者

全市全區松下町十番地

橫田五十吉

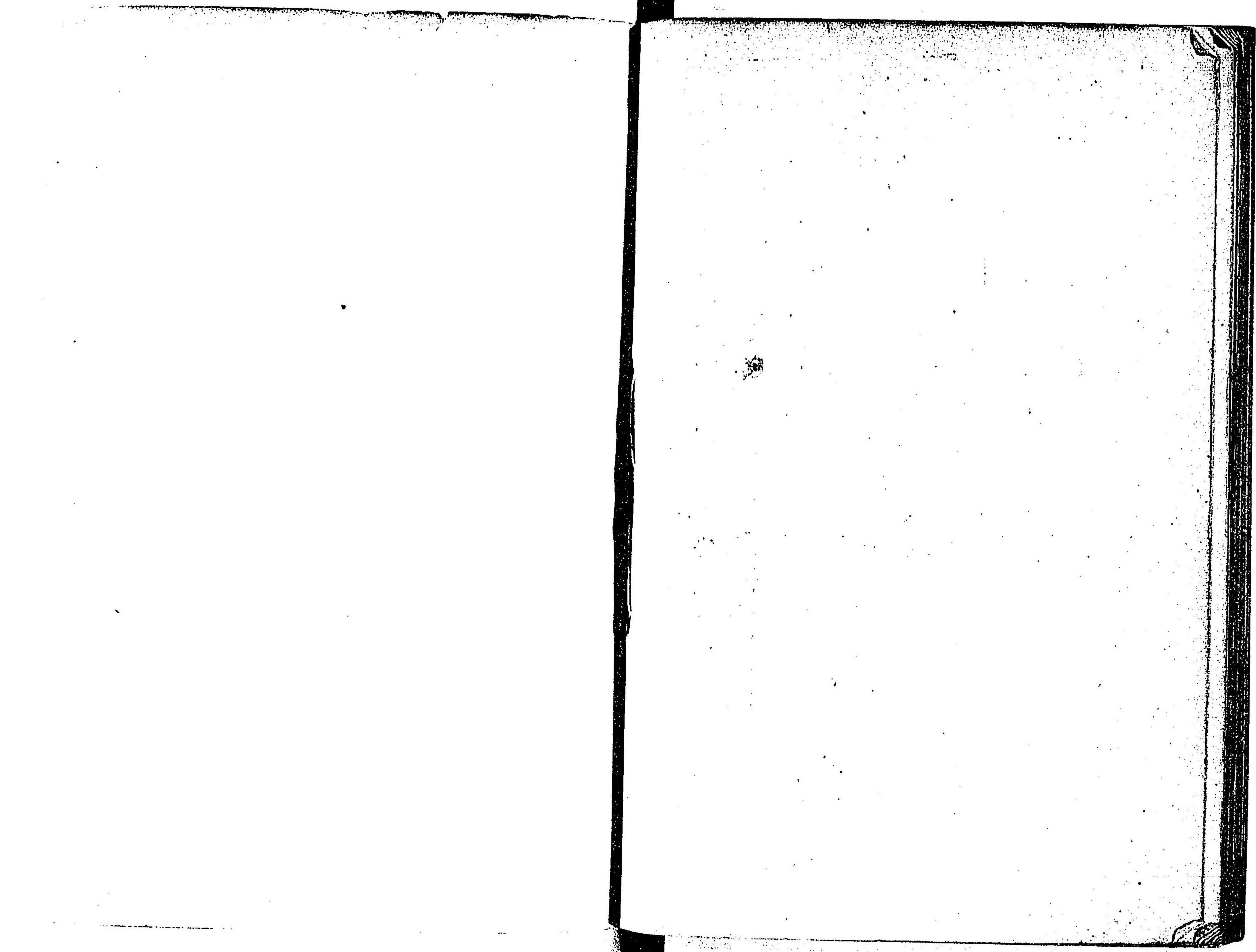
發行所

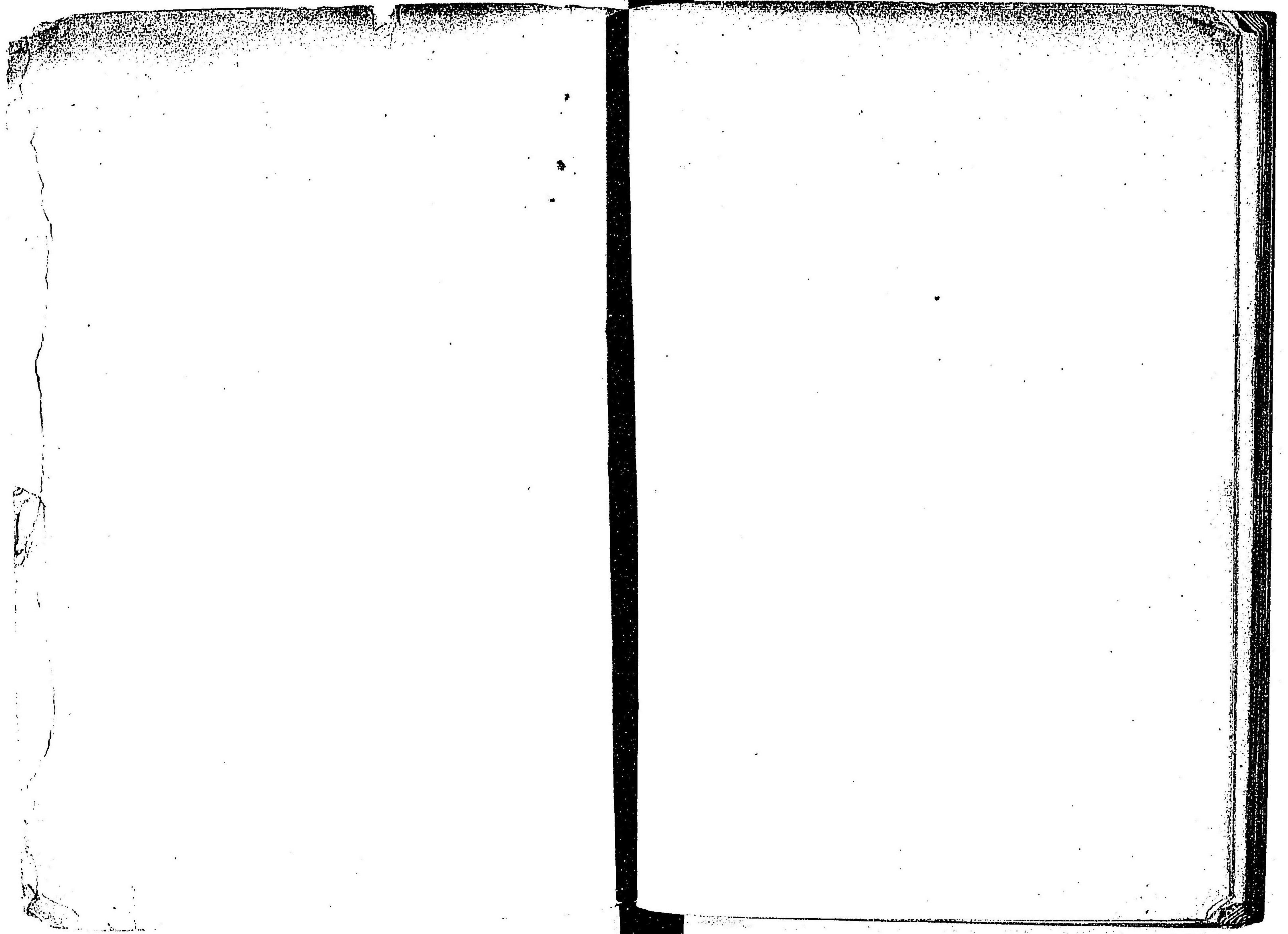
東京市神田區維子町卅番地

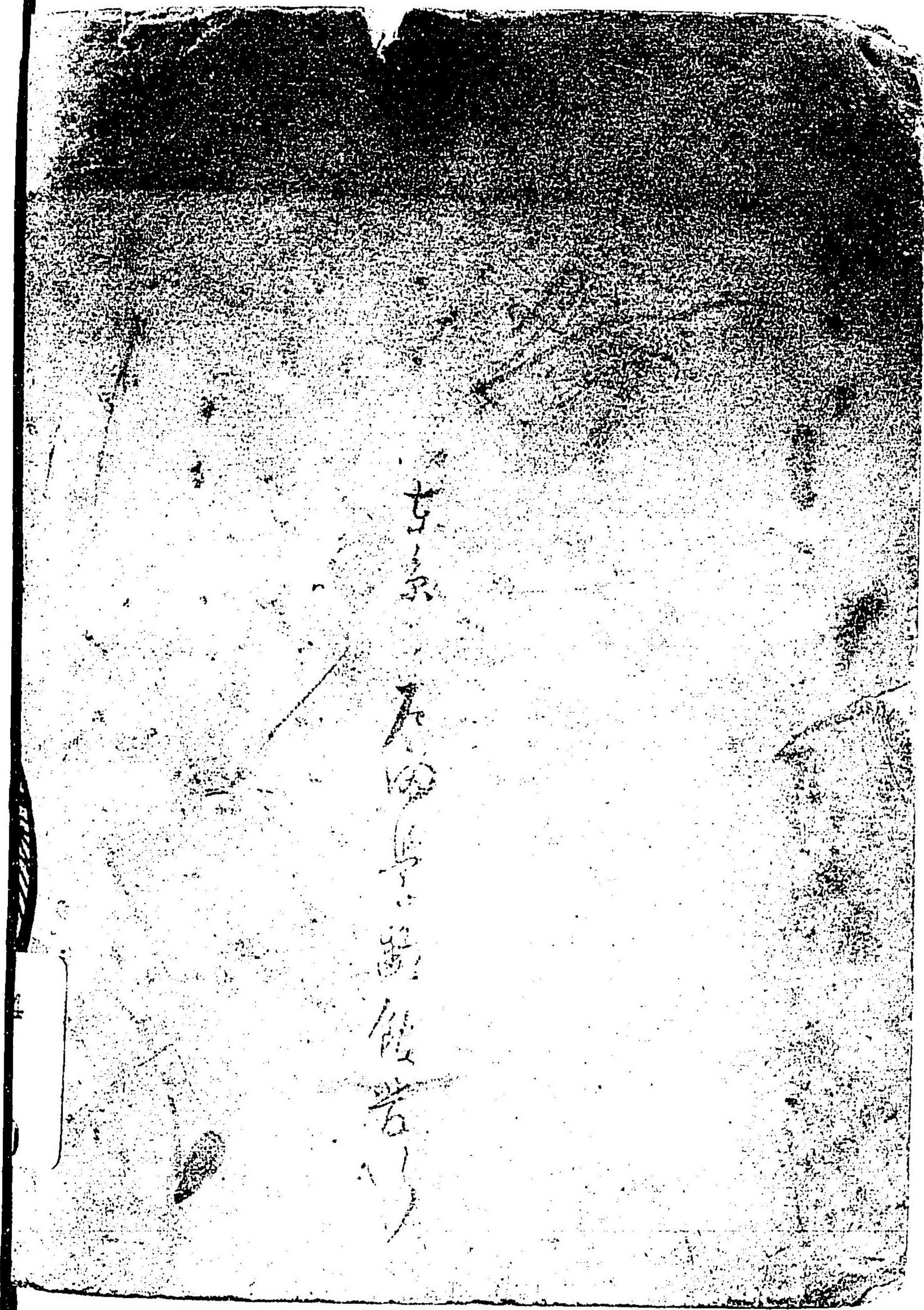
戶田學齡館

賣捌所

全國各地書林店







古
京
人
田
長
山
鐵
若
石